

第4章

計画の推進と進行管理

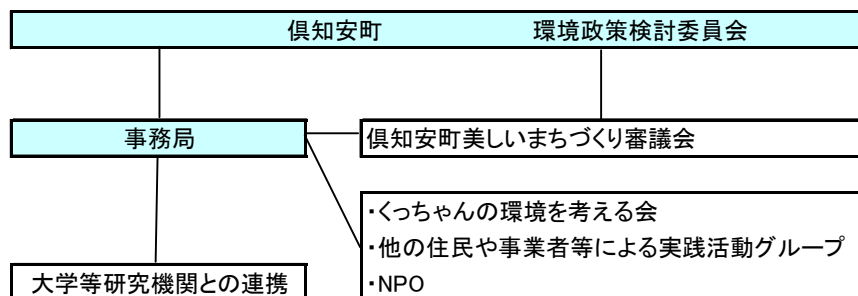
第4章 計画の推進と進行管理

第1節 計画の推進体制

(1) 町の取り組みによる計画推進

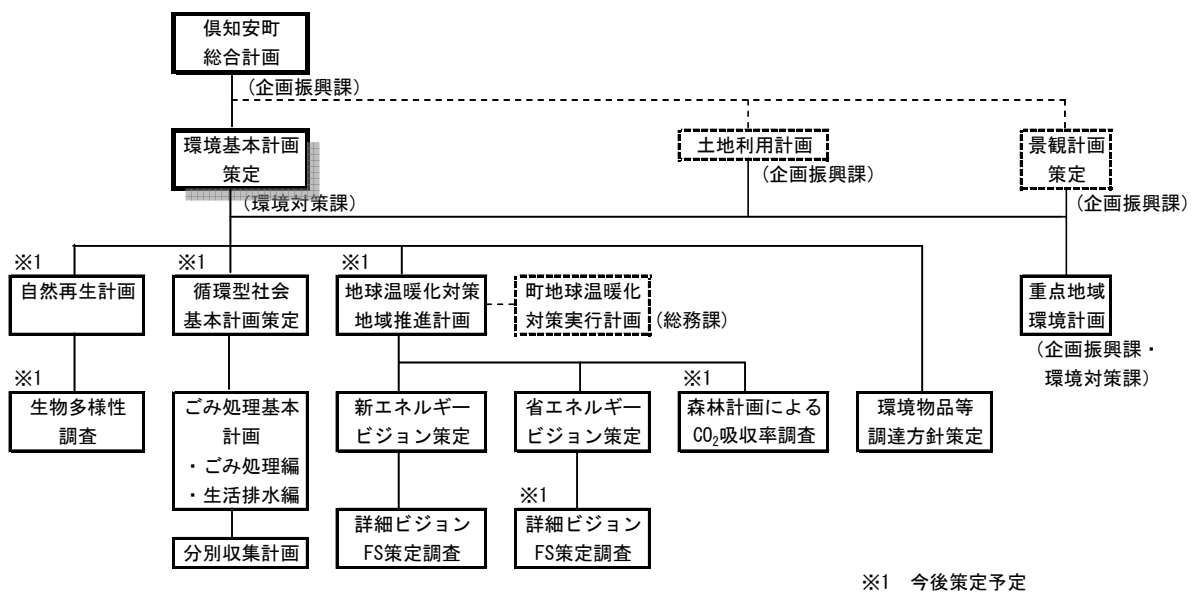
「俱知安町環境基本計画」の策定に向けて、全庁的な課題整理と施策調整等を行う機関として、2004(H16)年10月5日「環境基本計画策定等検討委員会」(2005(H17)年5月27日「環境政策検討委員会」に改組)が設置されています。本計画策定の原動力の一つである環境政策検討委員会は、計画の施策実現に向けて担当事業の推進や横断的調整など、もっとも主要な機能を担います。

■図表4-1：計画推進の体制



環境政策検討委員会では、環境基本計画だけでなく、地球温暖化対策地域推進計画や新エネルギー・省エネルギービジョン、環境物品等調達など、関連する諸計画や条例、施策の実現に向けた総合的な検討と推進の場になります。

■図表4-2：環境に関連する諸計画の体系



（２）住民、事業者、行政の協働による計画推進

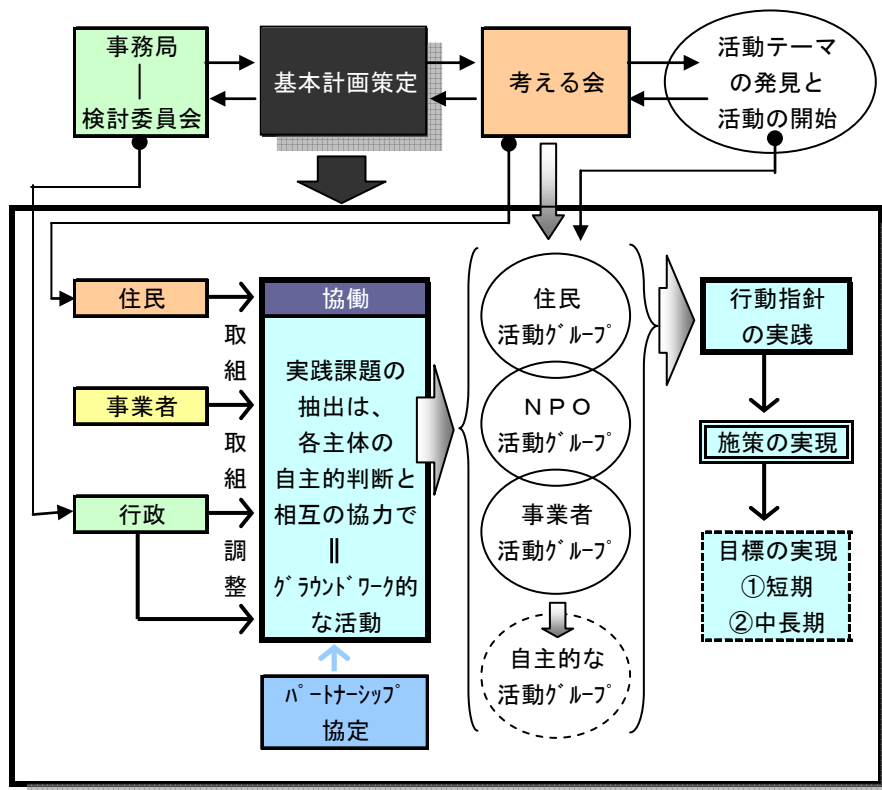
環境基本計画の推進主体は、これまでのように行政が中心となることは、環境課題の発生源を考えると、必ずしも適切・効率的とはいえません。行政だけでなく、環境問題発生源の当事者である住民や事業者も、その結果予想される公共的な課題を解決する主体の一翼として積極的に関与することが、環境問題解決の基本戦略です。住民自治による自治のまちづくりは、住民や事業者の積極的な参加なくしては成り立ちません。そして、それぞれの主体的な実践活動を支えるために、互いに協力し合う仕組みが、「協働」のまちづくりです。

そこで、基本計画策定の原動力となった公募参加の住民グループ「環境を考える会」が、策定過程において計画内容の一部について実践活動を開始したことを受け、計画の実践課程においては、「考える会」以外にも住民、事業者の自主的参加による実践活動グループを形成し、それぞれの関心に沿って環境問題への取り組みを進めることとします。この活動が、実質的に環境基本計画の推進活動に当たります。行政が自らの事業として行う活動も、このような住民や事業者による活動と連携をとりながらすすめます。行政はまた、住民や事業者による自主的な活動に対して側面からの支援など、さまざまな調整機能も担う必要があります。

計画の推進は、このような仕組みによる「協働」のまちづくりとして行われますが、協働における各主体の対等性と相互協力を確認するため、「パートナーシップ協定」の締結も有効な手段となります。

また、このような住民と事業者が軸となって行政がこれを支援する仕組は、住民主体の三者協働に基づくグラウンドワーク※59的な存在として、様々な産業団体などの支援も得ながら、将来的には住民主体による環境保全、環境創造、環境運営など幅広い活動を展開する機構へと発展することが期待できます。

■図表４－３：計画の推進体制



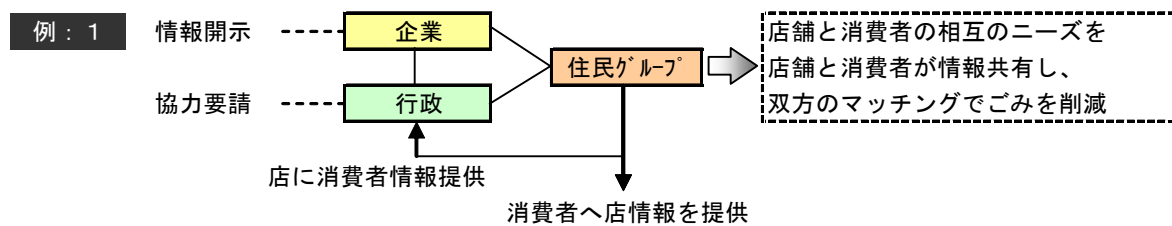
※注 59：用語解説 120 ページ参照

●協働による環境保全活動の倶知安町内の事例から

これまで、倶知安町内における住民の自主的な活動に対して、行政や事業者、研究機関などが協力して、協働で環境保全に向けた取り組みを行った事例がいくつかあります。この中からいくつかの類型を取り上げることで、計画推進の具体的な方法を検討する参考とします。

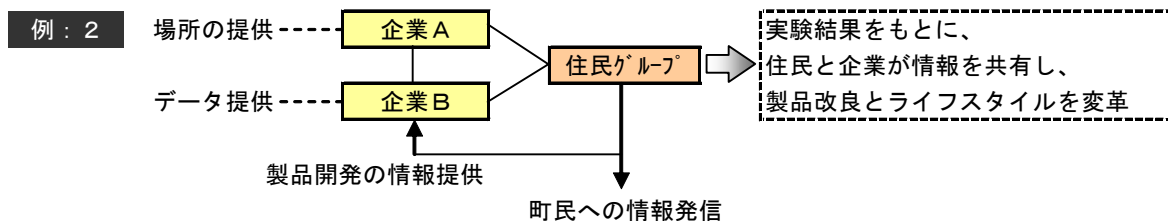
【事例1】：レジ袋削減とマイバッグ使用促進に向けた調査活動

町内大手スーパーのレジ袋使用状況とマイバッグ使用状況、レジ袋削減の方策などについてヒアリング調査を行い、その結果をもとに消費者と店舗双方への働きかけによるレジ袋削減の倶知安方式を模索している住民活動の事例です。行政は、店舗に対してヒアリング調査への協力を要請するなど、三者が協力し合う関係が期待されています。(2005(H17)年8月～)



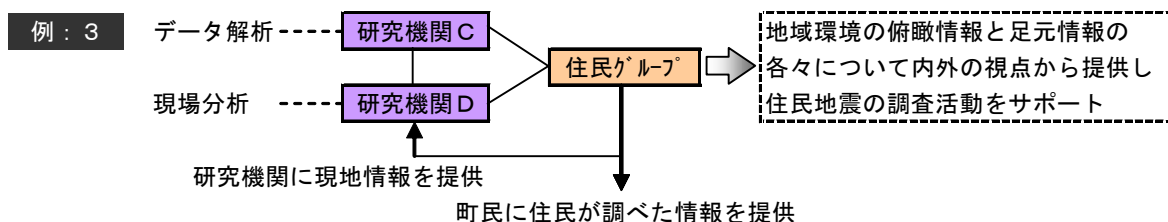
【事例2】：山に残されたティッシュの行方実験調査

野山の散策で用を足す場合は、その全てを持ち帰るのが原則ですが、ポケットティッシュなどが風雨で土に戻るかどうか実験し、適切なマナーの徹底に役立てようと始めた住民主体の実験活動。実験場所は町内A社の敷地が提供され、様々な紙の成分については町内B社から提供され、企業のノウハウの提供を受けながら協働で進めています。(2005(H17)年8月～)



【事例3】：市街地の緑のネットワーク調査活動

緑の少ない倶知安の市街地ですが、河畔や施設、街路など都市の様々な緑地を少しづつ連結して緑の回廊を形成する目的で、町外の大学研究室から緑地分布の粗密度GISデータの提供を受け、樹木や自然に詳しい町内研究機関の実地指導も得ながら、住民の視点と方法で回廊復活の方策を探り始めています。(2005(H17)年8月～)



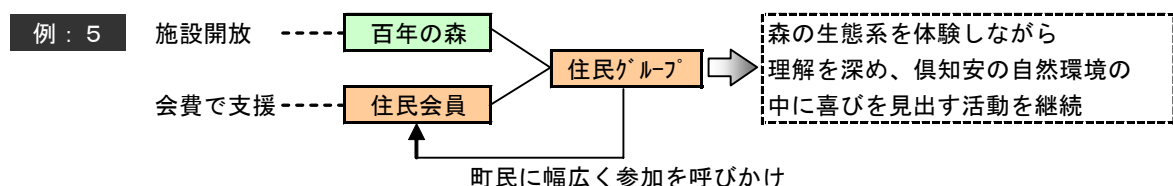
【事例4】：自然観察・体験トレッキング調査活動

川や森、山、そして動植物や産業歴史遺産など、町内の多様な自然環境資源について、実際に現地に出かけて体験や観察を重ねることで、自然環境とくらしのかかわりについて実践的に考えようという住民活動です。自然などについての実地に即した詳しい町内のネイチャーガイドのノウハウを活用し、行政側も実地の施設等の開放に協力したり、最小限の経費補助を行うなど、三者がそれぞれ力を発揮して協働の活動を推進しています。水源地探索、百年の森自然体験、ニセコ山系トレッキング、尻別川川くだり、沼めぐりなど、多彩なプログラムです。(2005(H17)年3月～)



【事例5】：森の生態系を体験し理解を深める活動

百年の森をフィールドとして、森の木々や様々な植物のこと、そこに生息するヒナコウモリやモモンガなど野生生物の生態、また星や月など天体の観測、冬の自然を楽しむ雪中キャンプ、自然について多様な視点から学び考える講座など、年間数十回もの多様な企画を通じて、活動を行っています。百年の森の管理人も積極的に住民の活動を支援、中心的な活動スタッフは、森に関心を持つ人を会員とし住民に広く参加を呼びかけ、町民も会員となって会費による支援を続けています。活動は10年にもわたっています。(1999(H11)年3月～)

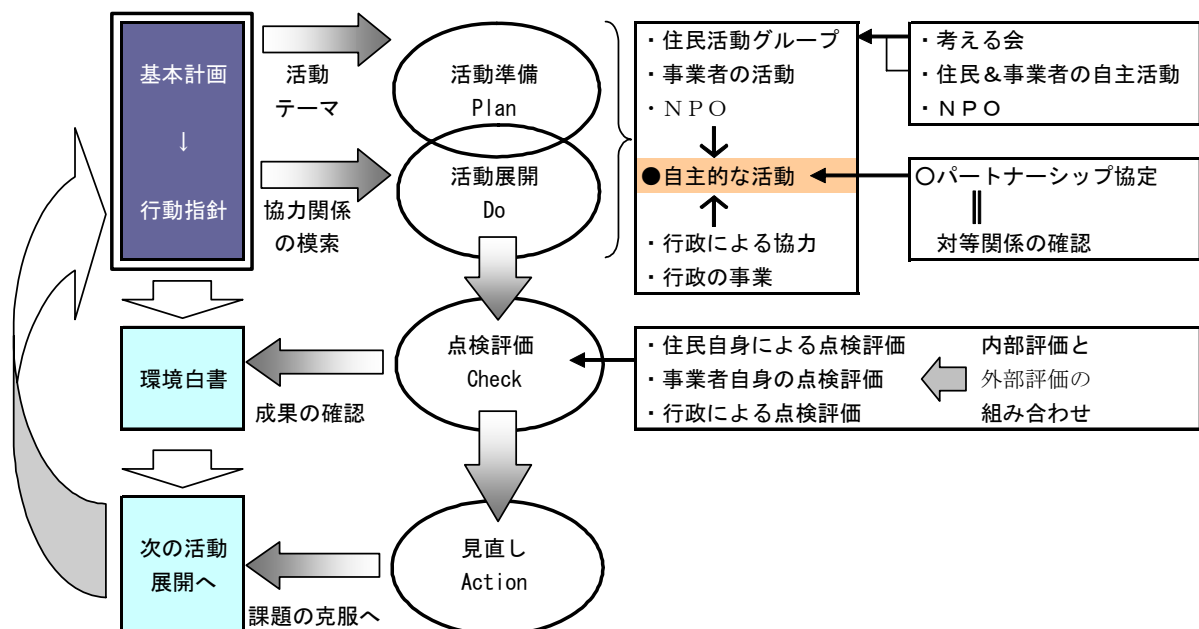


第2節 計画の進行管理

(1) 計画全体の進行管理

計画の推進主体である住民、事業者、行政は、それぞれが実践活動の企画・準備を行い、活動を展開します。自主的な活動が自治活動の基本となりますが、他の主体と協力し合い協働のまちづくりを進めることも重要です。計画の進行管理は、基本的に「活動の企画準備 Plan」→「活動展開 Do」→「点検評価 Check」→「見直し Action」のサイクルによって循環しますが、このPDCA各段階においても、計画→活動→白書といった別の循環が不可欠となります。したがって、このような主体的な実践活動の成果については、活動主体自身による内部評価に加えて、協働関係にある他の主体による外部評価も不可欠となります。評価の結果は「環境白書」としてその情報が共有されますが、この「環境白書」に示された評価結果に基づいて、次のステップに向けた総括や方針の練り直しなどを行い、実践活動を継続することになります。この循環型の進行管理を運営するのは、住民、事業者、行政といった実践主体自身です。

■図表4-4：環境に関連する諸計画の進行管理



(2) 5つの「環境を良くするはじめての一步」の進行管理

町民と行政や専門家有志等が協働で取り組む、地域特性に見合った環境テーマの活動案が、「環境を良くするはじめての一步」です。地域ごとの特性を反映した5つのテーマは、それぞれが倶知安の環境質を代表するテーマにもなっています。町民誰もが容易に参加できる活動内容であること、短期、中期、長期それぞれの目標に沿ってその成果の確認を行うための指標を備えていること、進行管理は参加する町民や行政が協働で行うことが、大きな特徴となります。

進行管理の大きな仕組みは、上記の計画全体進行管理に用いられるPDCAですが、活動の進捗状況に応じた5年サイクルのマクロな視野を重視します。

5つのテーマそれぞれの具体的な進行管理案は、次ページ以降のフロー図のとおりですが、これも活動の進捗と参加者の創意工夫によって柔軟に修正を加えながら展開します。

A：川の流域環境を良くするはじめての一步

川の流域 環境	短期		中期		長期	
	～ 5 年		～ 1 0 年		～ 1 5 年	～ 2 0 年
はじめの 一歩の 活動の例 ↓ 進行 管理 ↓	①クトサン川流域の自然観察体験					
	・ 流域の自然ウォッチング ➡		・ 水生生物や河畔植生調べ ➡		・ エコツーリズムの実験	
	②硫黄川流域の歴史産業遺産体験					
	・ 硫黄鉱山跡のウォッチング ➡		・ 産業遺産保全の方策調べ ➡		・ エコツーリズムの実験	
	③畑作・酪農地域や市街地が水循環に与える影響体験					
	・ 河川流入実態ウォッチング ➡		・ 水質調べ（観察や測定） ➡		・ 土地利用のルールづくり	
実現度を 測る 指標の例	□親水観察活動開催回数 ➡		□親水観察活動開催回数 ➡		□親水観察活動開催回数	
	□観察散策路の整備延長 ➡		□観察散策路の整備延長 ➡		□観察散策路の整備延長	
	□水辺環境への満足度 ➡		□水辺環境への満足度 ➡		□水辺環境への満足度	

B：山と森の環境を良くするはじめての一步

山と森の 環境	短期	中期	長期	
	～５年	～１０年	～１５年	～２０年
はじめの 一步の 活動の例 ↓ 進行 管理	①羊蹄山の森の自然観察体験			
	・山麓の森と湧水ウオッチング▶・地下水脈の行方マップづくり▶・エコツーリズムの実験			
	②ニセコ山系の森の自然観察体験			
	・山系ルートウオッチング▶▶・植生と自然マップづくり▶▶・エコツーリズムの実験			
	③山間部森林を往復する野生生物の行動観察体験			
	・野生生物の行動軌跡調べ▶▶・行動マップづくり▶▶・エコロードの案作成			
実現度を 測る 指標の例	□観察トレッキング開催回数▶	□観察トレッキング開催回数▶	□観察トレッキング開催回数	
	□育林活動住民参加者数▶	□育林活動住民参加者数▶	□育林活動住民参加者数	
	□森林の炭素蓄積量▶	□森林の炭素蓄積量▶	□森林の炭素蓄積量	
	□自然緑地への認知度▶	□自然緑地への認知度▶	□自然緑地への認知度	

C：水と農の環境を良くするはじめての一步

水と農の 環境	短期		中期		長期		
	～ 5 年		～ 1 0 年		～ 1 5 年	～ 2 0 年	
はじめの 一歩の 活動の例	①水田地帯の水循環調べ体験						
	・ 水田周辺の生物調べ		➡	・ 水の行方マップと生物地図		➡・ エコツアーリズムの実験	
	②百年の森湿地観察体験						
	・ 森の四季昼夜ウォッチング		➡	・ 植生と自然マップづくり		➡・ エコツアーリズムの実験	
	③地域の歴史資源探索体験						
	・ 文献データを下に歴史探訪		➡	・ 探訪結果のマップづくり		➡・ エコツアーリズムの実験	
進行管理 ↓							
	実現度を測る指標の例		□ビオトープ箇所数	➡	□ビオトープ箇所数	➡	□ビオトープ箇所数
			□森づくり活動参加者数	➡	□森づくり活動参加者数	➡	□森づくり活動参加者数
			□森の利用団体数	➡	□森の利用団体数	➡	□森の利用団体数
			□農地の緑への認知度	➡	□農地の緑への認知度	➡	□農地の緑への認知度

D：市街地の環境を良くするはじめての一步

市街地の環境	短期	中期	長期	
	～５年	～１０年	～１５年	～２０年
はじめの 一步の 活動の例	①都市公園や街路樹の樹種調べ			
	・在来種と外来種の区別調べ ➡ ・緑の街並み物語つむぎ ➡ ・外来樹種変更方法の検討			
	②街路の植栽柵の花と緑づくり			
	・落ち葉で植栽柵の土づくり ➡ ・有志で街路ガーデニング ➡ ・花と緑のランドデザイン			
	③街路樹や公園緑地、河畔緑地、農地周縁緑地など市街地周辺の緑の回廊づくり			
	・緑の連続性ウォッチング ➡ ・緑の回廊連結方法探し ➡ ・緑の市民プランの作成			
進行管理 ↓				
実現度を測る 指標の例	□街路植樹柵の花壇化活用率 ➡	□街路植樹柵の花壇化活用率 ➡	□街路植樹柵の花壇化活用率	
	□街路樹都市計画道路延長 ➡	□街路樹都市計画道路延長 ➡	□街路樹都市計画道路延長	
	□市街地緑地の在来種率 ➡	□市街地緑地の在来種率 ➡	□市街地緑地の在来種率	
	□街路の緑への認知度 ➡	□街路の緑への認知度 ➡	□街路の緑への認知度	

E：野生生物の環境を良くするはじめての一步

野生生物 の環境	短期	中期	長期	
	～５年	～１０年	～１５年	～２０年
はじめの 一歩の 活動の例	①町全域の野生動植物調査とデータベースづくり			
	・調査活動	➡・調査成果の整理	➡・調査活動	➡・調査の整理
	②調査や観察活動に伴うフットパス、グリーンウェイの連結整備			
	・フットパスのマップづくり	➡・連結方法探し	➡・連結整備の協働推進	
	③野生生物の分布を市街地に導入する緑の回廊の連結整備			
	・緑の連続性ウォッチング	➡・緑の回廊連結方法探し	➡・緑の市民プランの作成	
進行 管理				
実現度を 測る 指標の例	□野生生物調査への参加者数	➡□野生生物調査への参加者数	➡□野生生物調査への参加者数	
	□調査済調査区域の割合	➡□調査済調査区域の割合	➡□調査済調査区域の割合	
	□野生生物環境への認知度	➡□野生生物環境への認知度	➡□野生生物環境への認知度	

「環境白書」は今日、自治体の地域特性に合わせて様々なタイプのものが作成されていますが、本町においては、「環境保全行動指針」の実践主体ごとの実施達成度の記録を軸に、内部評価と外部評価を関連させて報告する方式とします。

- 各施策ごとに、下記の様式で事業や活動を紹介し、成果を内部・外部で評価し、次期への活動方針を定める。
- 5年ごとの白書作成に向けて、活動主体による合同意見交換会と相互評価、住民アンケートを実施する。

施策	No.	羊蹄山やニセコ山系の生態系や景観などの自然環境全体を保全する
----	-----	--------------------------------

■この5年間（○年度～○年度）で実施したこと（※実施できなかったこと含む）

①達成度

5 10 15 20年

短 中 長

(※担当課→環境対策課→全町で判断)

②背景等

(担当課による記述)

③住民意見

(白書素案へのパブリックコメント、アンケートなどから)

内部評価

外部評価

④次期方針

・ ・ ・ ・ ・（進行状況を踏まえた次期５年間の取り組み方針） ・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・（各主体の意向を可能な限り反映） ・ ・ ・ ・ ・

2) 「はじめの一步」編

- 「一步」ごとに、下記の様式で事業や活動を紹介し、次期への活動方針を定める。
- 5年ごとの白書作成に向けて、活動主体による合同意見交換会と相互評価、住民アンケートを実施する。

※例

A：川の流域環境を良くするはじめの一步

川の流域 環境	短期	中期	長期	
	～５年	～１０年	～１５年	～２０年
はじめの 一歩の 活動の例	①クトサン川流域の自然観察体験			
	・流域の自然ウォッチング ➡	・水生生物や河畔植生調べ ➡	・エコツーリズムの実験	
	②硫黄川流域の歴史産業遺産体験			
	・硫黄鉱山跡のウォッチング ➡	・産業遺産保全の方策調べ ➡	・エコツーリズムの実験	
	③畑作・酪農地域や市街地が水循環に与える影響体験			
	・河川流入実態ウォッチング ➡	・水質調べ（観察や測定） ➡	・土地利用のルールづくり	



■この5年間（○年度～○年度）で実施したことを包括的に（※実施できなかったこと含む）

住 民	
事業者	
行 政	（データ、解説、写真、GIS、報告、など）.....



■この5年間（○年度～○年度）の進展具合を指標で表す

実現度を 測る 指標の例	□親水観察場所数	（○年度）→.....（○年度）
	□ウォッチングマップ作成数	（○年度）→.....（○年度）
	□フットパス整備延長	（○年度）→.....（○年度）
	□魚道設置箇所数	（○年度）→.....（○年度）
	□水辺環境への満足度	（○年度）→.....（○年度）



■この5年間の活動を振り返り、今後の活動の可能性を話し合う

.....（活動参加の住民と支援している行政などの話し合いの結果を紹介）.....